

# なぜ、文芸は社会に必要なのか？

## 一松高出身の作家・辻邦生が残した問い

話題提供 **三輪 太郎**さん (文芸批評家  
・東海大学文化社会学部文芸創作学科教授)

日 時 **6月8日(土)** 午後1時30分～3時30分(予定)

会 場 **あがたの森文化会館 講堂第一会議室** 参加費 200円

※ 電話での事前申し込みが必要です

旧制松本高校の出身者に、辻邦生(1925-1999)という作家がいます。戦後日本を代表する作家のひとりです。私は辻さんの担当編集者でした。

辻さんが亡くなって4半世紀、日本の出版業界は売り上げが半分以上となり、街の本屋さんも出版社も減りました。大学生の半数は1年に1冊も本を読まない、という調査結果も出ています。

辻さんは旧制高校の「教養主義」を呼吸して、本を読み、本を書きました。紙媒体の本と不可分の「教養主義」は、1970年代から揺らぎだし、1980年代に後退し、今や跡形もなく消え果てたかに見えます。

「教養」の根幹は、歴史と哲学と文芸にある、と私は上の世代の作家や編集者から教えられてきました。IT全盛、データ主義全盛の今、かつての「教養」はもはや不要なののでしょうか？そもそも、文芸書や人文書は社会に必要なのでしょうか？

実は、この問いは辻さんが修業時代に直面し、乗り越えるべく格闘した問いでした。そして、今、私が大学で文芸を学ぶ学生たちと接しながら、日々直面し、乗り越えなくてはならない問いにもなっています。

今回のサロンでは、辻邦生という作家を紹介するだけでなく、辻さんを介して、なぜ、文芸は社会に必要なのか、という問いを提起して、参加者のみなさまと対話ができればありがたいと思います。

三輪太郎(みわ・たろう)さんは1962年名古屋生まれ。早稲田大学第一文学部卒。文藝春秋にて、編集者として文芸書の出版に携わる。1990年、『豊饒の海』あるいは夢の折り返し点で群像新人文文学賞(評論部門)受賞。2006年、『ポル・ポトの掌』で日経文学大賞佳作。2015年、『憂国者たち』で三島由紀夫文学賞候補。著書は他に、『死という鏡』『村上春樹で読む世界』『大黒島』など。

☆テーマに沿って話題提供者の話のあと、気楽に懇談。自由にご参加ください。

主催：サロンあがたの森実行委員会 共催：旧制高等学校記念館・記念館友の会

申し込み・問い合わせ 旧制高等学校記念館 ☎35-6226 FAX 33-9986